

# 長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡(3次調査)広報発表資料

(公財)京都市埋蔵文化財研究所  
2024年6月25日(火)

所在地:京都市伏見区淀水垂町地先  
調査期間:2023年11月6日～2024年5月28日  
調査面積:1,900㎡(6区) 調査対象面積:約15,000㎡

## 1. はじめに

本調査は、国土交通省淀川河川事務所が淀川水系河川整備計画に基づき、桂川の洪水時における治水安全度を向上させるための河積拡大(掘削工事)に伴うものです。調査地は長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡に該当します。調査は数年に分けて実施する計画で今回の調査は3次調査にあたり、宮前橋の北側に調査区(6区)を設定しました(図1)。なお、6区の発掘調査は終了しています。

調査地は桂川右岸の河川敷に位置しており、伏見区淀水垂町に所在します。この一帯は平安京・京都の外港である「淀津」の推定地であり、中世の史料には「淀津水垂」として登場します。淀津は、古代から中世にかけては平安京・京都に運ばれる税物や塩・材木などが荷揚げされる淀川水運の一大拠点であり、付近には船大工も居住していました。安土桃山時代に伏見港が整備されてからは、荷揚げ港としての淀の機能は衰退しますが、水垂と対岸の納所には船主など水運業に携わる人々が多数生活していました。しかし、明治時代に入り、京都・大阪間の鉄道や道路などの陸上交通網が整備されたことにより、淀川水運の重要性は大きく低下します。さらに、明治29年(1896)から始まった淀川水系の河川改良工事に伴う桂川・宇治川の流路変更や拡幅・堤防修築事業によって、河川と集落との結びつきは切り離され、淀周辺の港湾機能はほぼ失われることとなりました。

## 2. 調査成果

調査区東部で江戸時代前期の桂川西岸とその護岸を約70mにわたり検出しました。護岸は江戸時代前期に造られ、江戸時代後期と明治時代に修復されています。江戸時代前期の護岸や石組には丸みを帯びた河原石が多用されていますが、江戸時代後期と明治時代の護岸には頁岩けつがんの割石が用いられており、時期によって護岸に用いられる石材が異なっていたことがわかりました。

### (1)護岸・石組について

江戸時代前期の護岸は、護岸6006・6300・6301と一定の間隔をおいて並ぶ4基の石組(石組6004・6010・6100・6385)からなります(写真3・4、図2)。護岸の構造は石積みもの(護岸6006)と、板材で土留めしたもの(護岸6300・6301)があります。土留めに用いた板材は、川船の一部を再利用していました(写真9)。石組は河岸の斜面に石を積み構築された平面方形の構造物で、昇り降りや荷揚げするための雁木かんぎ(階段)や、荷物を仮置きする小屋のような施設の基礎となる可能性があります。石組6004・6010は、その石組の基礎として、解体した川船が用いられていました(写真1・2、図3・4)。これらの護岸や石組は、出土した土器から17世紀前半に造られたことがわかります。

### (2)出土した川船について

護岸には、少なくとも6艘の川船が、土木資材として再利用されていました(写真5)。部位が不明なものもありますが、船形をとどめた状態で出土したものがありました(各部名称は図8を参照)。

船1・2は、船底板・オモキくりさい(刳材)・舷側板ふなぐさが船釘で結合された状態で出土しました(写真8)。船1は残存長2.9m以上、幅1mあり、北側は調査区外に続きます。船2は残存長6.6m、幅0.8mになります。

船3は、船底板・オモキ(刳材)・舷側板・船梁が船釘で結合された状態で検出しました(写真6・7、図5)。残存長7.4m、幅1mになります。さらに底板の北側では、船首(もしくは船尾部)と考えられる、斜め板と三角板で構成された部材を船底板の上面で釘で重ね張りしているのを確認しました(写真7)。これと類似する部材と接合方法は、現存する淀川・大和川水系の川船でも認められます(図6)。

船4は、オモキ(刳材)・舷側板が船釘で結合された状態で出土しました(写真9)。長さ1.5m、6.9m、5.3m、4.9mの4つの部材がありますが、これらが同一の船の部材であるかは、今後の検討課題となります。

船5は、船底板が船釘で結合された状態で出土しました。残存長4.3mになります。

船6は、部位は不明ですが、船釘を打ち込んだ痕跡が残る船板です。残存長0.6mになります。

## 3. まとめ

今回の調査で検出した護岸は、出土した遺物の年代から元和9年(1623)の淀城築城および城下町整備に伴って構築されたと考えられます。このうち護岸の土木資材として再利用されていた川船は、少なくとも6艘が確認でき、そのほとんどが船板と船板が結合された状態で出土しました。

全国の川船の出土事例をみると、船材は板材と金属製品(船釘など)に分別してリサイクルされていることが多く、特に高価な釘などの鉄製品は打ちなおし等を行って再利用されます。しかし今回見つかった川船は、板材が船釘で結合されたまま護岸の構築材として再利用されたため、船形をほぼ保った状態で出土しました。江戸時代前期の板材を組み合わせた船で、船底から舷側までの船体構造が残る出土資料は全国でも初めてのものであり、非常に貴重な発見となりました。調査地である淀は、江戸時代においては淀川水系の水運業の拠点であり、史料によると寛永3年(1626)には230艘、正徳4年(1714)には507艘(水垂は176艘)の船が保有されていたと記されています。このように、調査地周辺に多数の船が存在していたからこそ船材を護岸材として再利用できたのであり、それら船材を基礎とした石組も水運に関係した施設である可能性が高いと考えられます。

さらに、出土船の構造について重要な知見を得ることができました。今回発見された6艘のうち、4艘で船底板と舷側板とをつなぐ部分にオモキという丸太を刳りぬいた材(刳材)が使用されていました。

これら出土船には、近現代までおもに日本海で使われたオモキ造りの船とは異なる特徴もみられますが、オモキ(刳材)を舷側板と船底板のつなぎ目に用いるという点では同様の技術です(図7)。江戸時代前期の淀川水系にその技術があることが、今回初めて確認できました。古来からの幹線航路として多くの荷や人々が行き交った淀川水系で発見されたことは、今後、同水系のみならず、日本列島における和船の発達史や地域性を解明する上で重要な成果といえるでしょう。

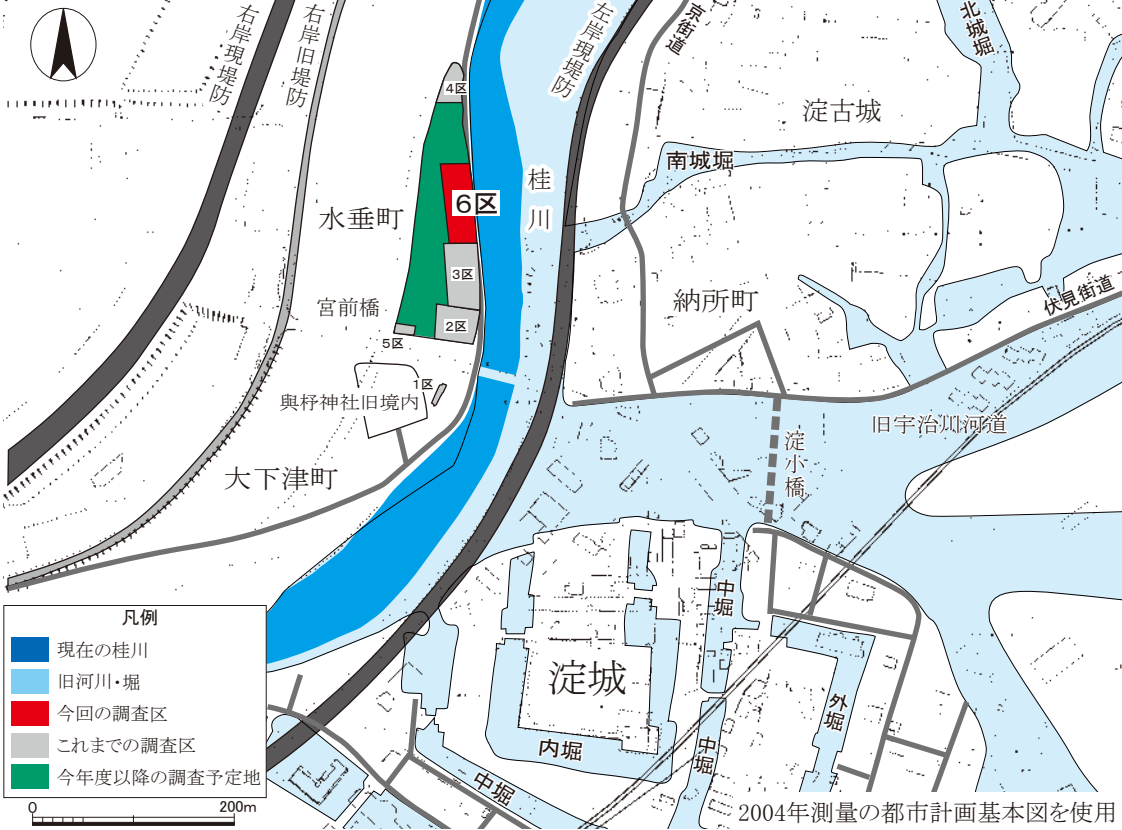


図1 調査地理位置図(1:7,500)

表1 淀周辺関連年表

|          |           |                                                                                             |
|----------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 延暦23年    | 804       | 「淀津」が史料上初出する。(『日本後期』)                                                                       |
| 弘安8年     | 1285      | 「淀津水垂」が史料上初出する。(『北野神社文書』)                                                                   |
| 明応2年     | 1493      | 淀小橋の北に住む船大工が奈良に向いて船の修理に携わる。(『大乘院寺社雑事記』)                                                     |
| 天正16年    | 1588      | 豊臣秀吉が淀に築城を命じる(淀古城)。翌天正17年に修築が完了する。(フロイス『日本史』)                                               |
| 文禄元～5年   | 1592～1596 | 豊臣秀吉が淀古城を廃城とし、櫓などを移築して伏見城を築城する。(『駒井日記』、『太閤記』) また宇治川の改修を行い(『家忠日記』、『村井重頼覚書』)、港湾機能を淀津から伏見港に移す。 |
| 慶長3年     | 1598      | 淀の河村氏・木村氏に川方支配方への着任が命ぜられる。(「過書座二十石船由緒書」)                                                    |
| 慶長15年    | 1610      | 「水足(水垂)と申所・・・船のかせき(稼ぎ)を第一と仕申候」とある。(『念仏寺文書』)                                                 |
| 慶長19年    | 1614      | 大坂冬の陣の折、淀納所・水垂に本拠を置く淀船(20石船)を動員。(「淀船旧例之覚」)                                                  |
| 元和9年     | 1623      | 伏見城を廃城とし、淀城の築城が始まる。水垂は城外町として整備される。                                                          |
| 寛永3年     | 1626      | 淀に230艘の上荷船。(『京都御役所向大概覚書』)                                                                   |
| 寛永14年    | 1637      | 永井尚政が木津川の付け替えを行い、城下町を拡張する。(『淀下津町記録』)                                                        |
| 正徳4年     | 1714      | 淀船(20石船)の保有数は水垂が176艘、納所が331艘。(『田邊文書』)                                                       |
| 享保9年     | 1724      | 水垂が保有する淀船(20石船)の数は176艘(うち158艘が稼働)。                                                          |
| 明治元年     | 1868      | 洪水後の災害復旧で京都府・淀藩合同で木津川の付け替えが行われる(～明治3年)。                                                     |
| 明治29～33年 | 1896～1900 | 河川改修工事に伴い桂川が拡幅され、水垂・大下津町の集落が移転する。                                                           |
| 平成18年    | 2006      | 引堤事業により水垂・大下津町の集落が移転する。                                                                     |



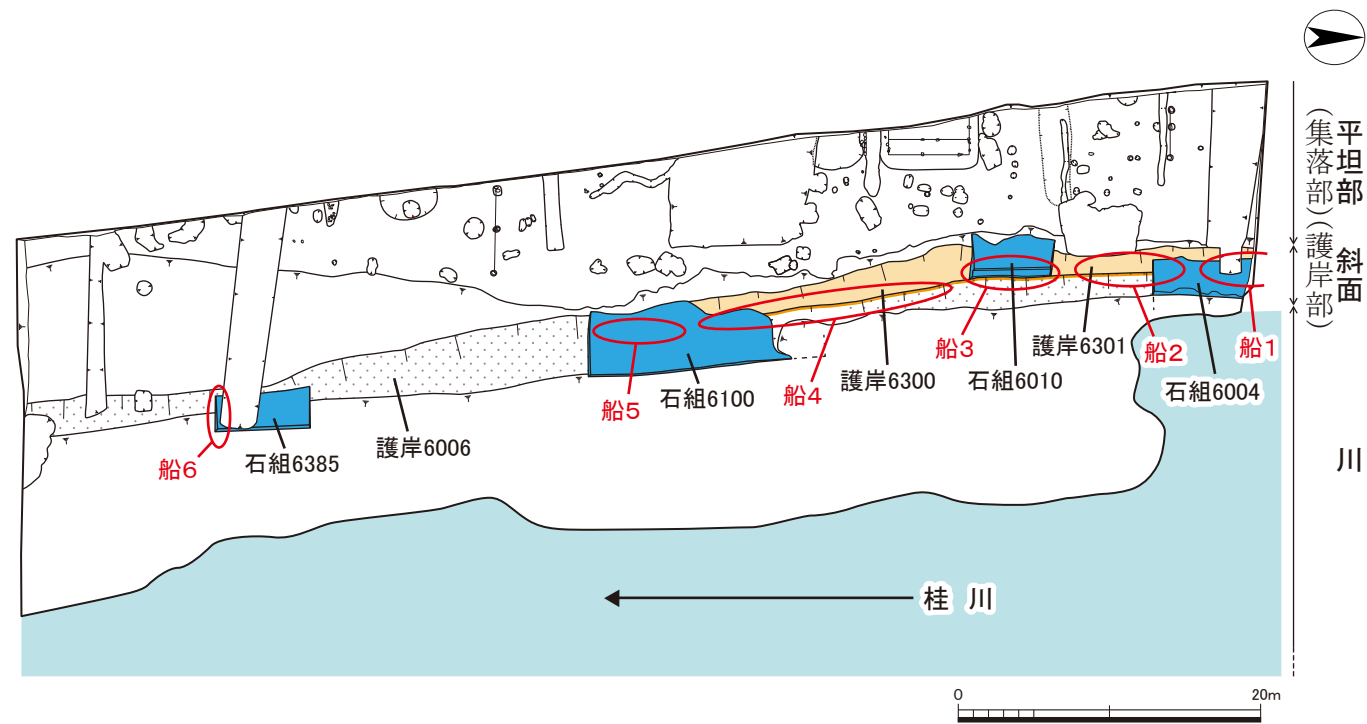


図2 6区遺構概略図(1:500)

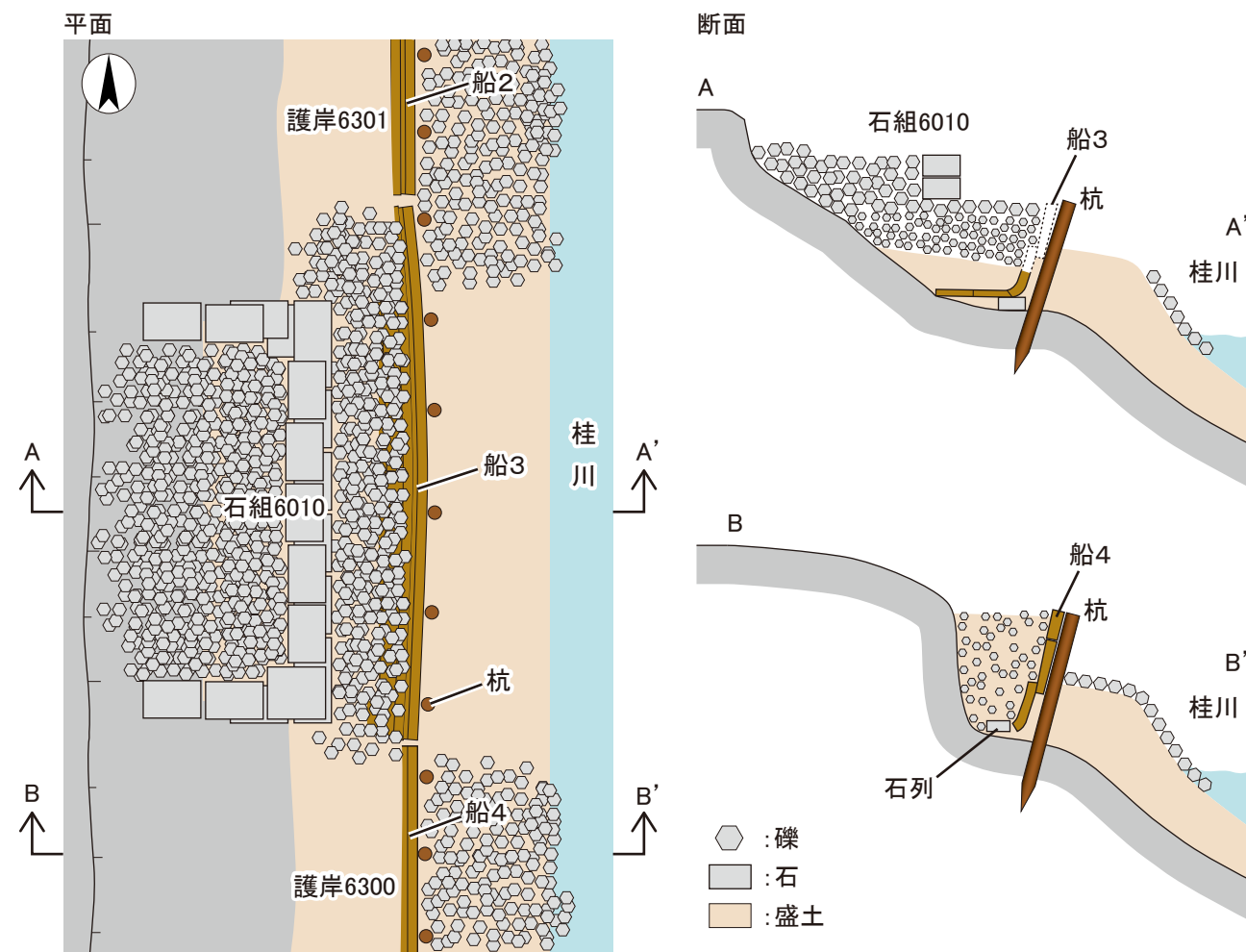


図3 石組6010・船3・4模式図

石組6010オルソ画像



船3オルソ画像



図4 石組6010・船3調査過程(1:500)



写真1 石組6010検出状況(北東から)



写真2 石組6010断割状況(南東から)



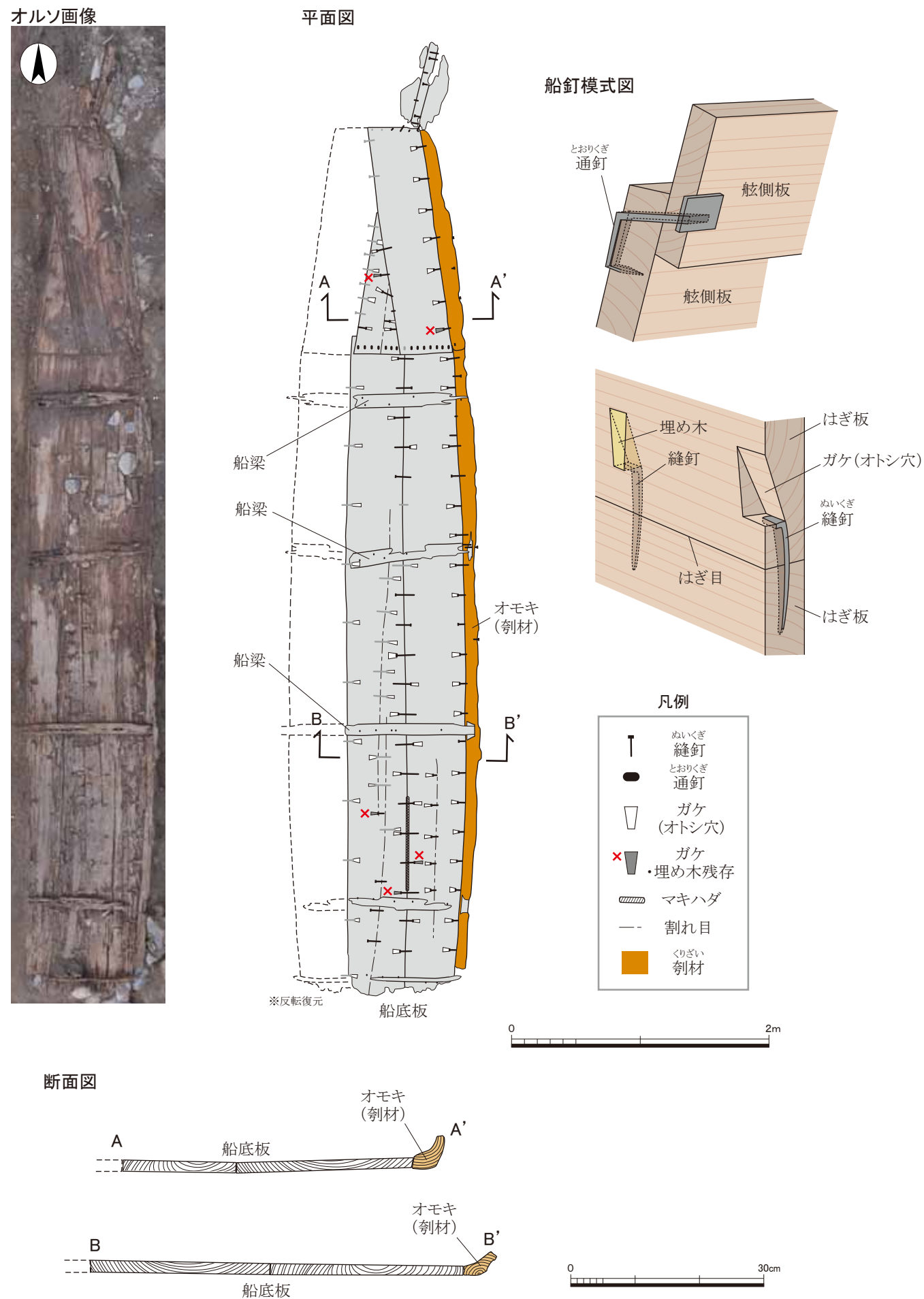


図5 船3模式図(平面図1:40、断面図1:8)

船釘模式図は石井謙治1995『ものと人間の文化史76-1 和船Ⅰ』法政大学出版局から一部転載

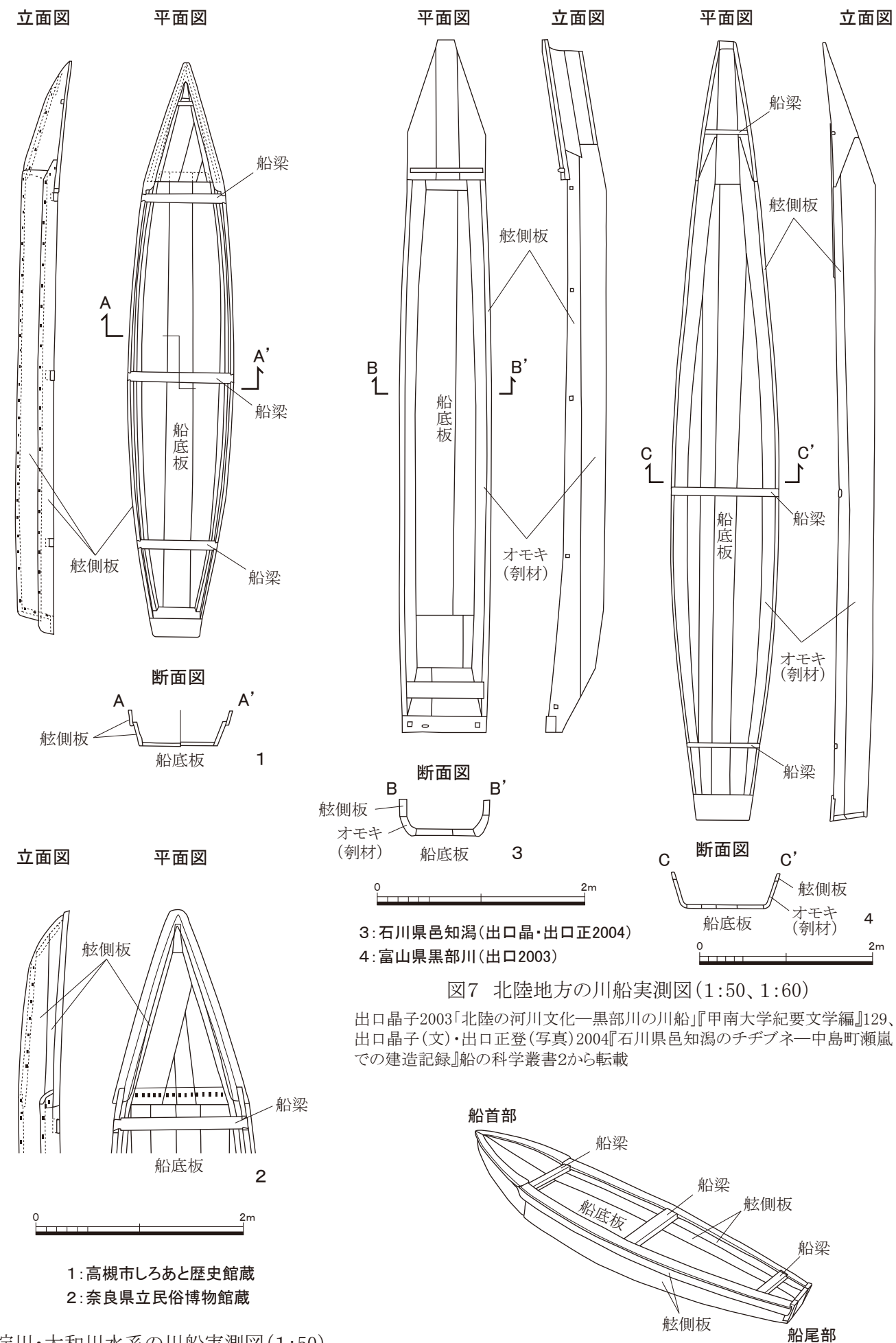


図7 北陸地方の川船実測図(1:50、1:60)

出口晶子2003『北陸の河川文化―黒部川の川船』『甲南大学紀要文学編』129、  
出口晶子(文)・出口正登(写真)2004『石川県邑知潟のチヂブネ―中島町瀬嵐  
での建造記録』船の科学叢書2から転載

図8 本資料で用いた各部の名称

横出洋二1991「伏見の船大工」『山城郷土資料館報』第9号をもとに作成

図6 淀川・大和川水系の川船実測図(1:50)

織野英史2016「二枚水押船－淀川・大和川水系の主要川船」  
『歴史と民俗』神奈川大学日本常民文化研究所論集32から転載

1:高槻市しろあと歴史館蔵  
2:奈良県立民俗博物館蔵





写真3 6区全景(北東から)



写真6 船3(南西から)



写真4 護岸・石組(北東から)



写真5 船1～6(北東から)



写真7 船3 斜め板・三角板(北東から)



写真8 船2 船釘結合状況(東から)



写真9 護岸6300に再利用された船4(南東から)